資料１

# 占用地の外来植物対策

光田　重幸

河川敷の占用地は一般には高水敷の平坦地にあり、環境条件としては乾燥地が主体である。そのため洪水による攪乱を受けにくく（最近の異常出水では、必ずしも当てはまらないが）、外来植物が繁茂しやすい立地である。また、河川敷であるので除草剤などの薬剤の使用には大きな制限がある。ここでは植物の生育パターンの解析を主体に、効果的な外来植物の抑制方法を考えてみたい。

種子繁殖から見た植生の生態学的なコントロールには、以下の原則がある。一年草については、とくに重要である。

1. **外来植物は発芽可能な種子をつけるまえに刈り取り、在来植物（とくに稀少種）は種子を植物自身が散布してから刈り取る。**そのためには、占用地にどのような植物が生育しているか、常に把握しておくことが重要である。特定外来生物のアレチウリなどは、種子が発芽可能となる 9 月上旬までなら、刈り取り後一週間程度現場に放置し、植物体が枯れてから搬出することが容易となる。

**アレチウリ　葉と果実**

**同　雄花の花序**

**同　発芽可能な段階**

2. **メリケントキンソウなど刈り取りが不可能な低小草本では、場合によっては表土の入れ替えが必要となる。その場合、真砂土などの肥料分の少ない土を使うこと。**
メリケントキンソウは初秋に発芽し 6 月に種子が完熟する。5 月には果周囲にある刺が発達し人やペットに被害を与え始めるので、土を入れ替えるのであれば、2～4 月におこなうのが望ましい。薬剤駆除としては比較的安全なクエン酸や重曹を使う方法も研究されている。刺をもつ果の物理的な除去方法として、ゴムマットを巻いたローラーを転がす方法など、今後の研究の余地がある。

**メリケントキンソウ　草体**

**同　果実群の刺鱗片**

**同　靴底に果実ごと刺さる**

3. **秋―春生育型の外来植物を抑制するには、草刈りをできるかぎり秋遅くにする。**これは、草刈りを晩夏までに終えてしまうと発芽した外来植物に太陽光が充分に当たるようになってしまい、冬の間に深く根をはり大型に育つからである。優占群落をつくりやすいネズミムギやホソムギなどが、これに該当する。

**ネズミムギの群生**

**同　花序群**

**同　穂の一部拡大**

**地下に根茎を張る多年草の場合**は、定着してしまうと刈り取りだけでは抑制が困難であり、場合によっては刈り取りが地下の根茎の増加を促す場合もあると考えられる。セイタカアワダチソウやセイバンモロコシ(写真　左)がこの例である。

このような種類は優占群落をつくり、**昆虫などを含めた生物多様性を一気に減少させる**ので、種子が発芽可能となる前の 10 月上旬までに刈り取ることと、定着まえの早期抜き取りが重要である。根茎を広く張ってしまうと、表土（深さ 40～50 センチまで）の入れ替えが必要になる。

**セイバンモロコシ　実生個体二年目秋の姿**

**同　左を拡大　二年目以降急に大きくなる**